大阪大学大学院生命機能研究科

第六回　学生主催若手合宿研究交流会

報告書

第六回学生主催若手合宿委員会

生命動態イメージングプロジェクト

1. 本合宿について

＜合宿の目的＞

学生主催若手合宿研究交流会は、イノベーションの礎となり生命機能研究科の理念でもある「異分野融合」を促進するために、学生・若手研究者が主体となった研究交流を目的として、昨年度までは生命機能研究科 GCOE プログラムの一環として開催されてきた。GCOE 終了後の今年度もその目的を継承して開催した。

第 6 回となる今回の合宿では、「若手 Evolution」をテーマとして掲げた。その目的は、多様な研究分野や分化をバックグラウンドとしてもつ参加者同士が、合宿中のさまざまな取り組みと交流を通じて相互に理解し、研究者として成長し、将来の「異分野融合を通じた“おもろい研究”」につなげていくことである。そこで今回はこれらを意識したプログラムを用意するとともに、昨年と同様に海外と名古屋大学の学生も本合宿に参加していただいた。

＜合宿の概要＞

第 6 回学生主催若手合宿研究交流会は、2012 年 7 月 31 日（火）から 8 月 2 日（木）までの 3 日間、前回に引き続き KKR ホテルびわこ（滋賀県大津市）にて開催した。参加者の総数は 66 名で、そのうち本合宿に合わせて海外から 2 名（留学生自体は 8 名）、名古屋大学から 3 名の学生に参加していただいた。

本合宿では原則として英語を共通言語とした。研究内容を紹介し合うポスターセッションや、グループメンバーの専門性を生かして「新しい研究室を作る」ことを目標に議論するグループディスカッションなどを行った。また、研究者として第一線で活躍されている先生をお招きして、その研究内容や研究者としての生き方について講演していただいた。さらには、グループディスカッションでのプレゼンテーションの準備もかねて、各々の研究内容のおもしろさを効果的に伝える方法についての実践型の講演会も開催した。

（文責: 川上 拓宏　D3/D5　小倉研）

2. ポスターセッション

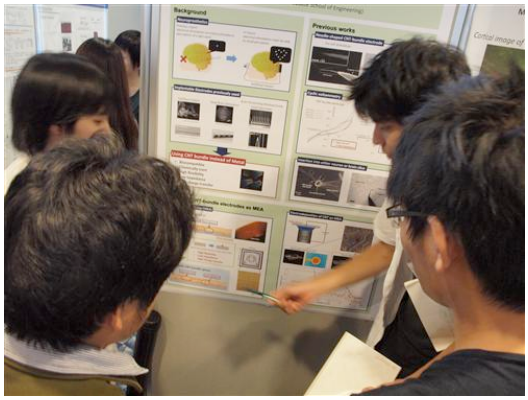
＜担当者＞

長谷川　翔（小倉研 D2/D5：文責）
加賀　由章（仲野研 D2/D5）
谷内　智行（河村研 D2/D5）
平山　育実（田中研 D3/D5）
吉田　真理（四方研 D2/D5）

＜目的＞

ポスターセッションでは学会と同じ形式で自分の研究内容をポスターで発表し、また他の参加者の発表を聞くことで互いの研究内容への理解を深めることが目的である。また、グループディスカッションのメンバーの研究背景を知るための資料としての目的もある。

＜内容＞



ホテル到着後、指定された場所に各自でポスターを掲示し、特別講演終了後からポスターセッションを行なった。最初の１時間は奇数のポスター番号の参加者が発表、続いて偶数の参加者が発表した。その後、ホテルの部屋へのチェックインのため一時セッションは中断するが、部屋に荷物の移動後はフリーセッションを兼ねた休憩時間とし、自由にディスカッションを行える時間を設けた。また参加者に印象に残ったポスターのアンケートをとりポスター賞の表彰を行なった。

＜結果・考察＞

多くの参加者により積極的な議論が行われていた。前回の合宿ではセッションの時間を長くしたにもかかわらず「時間が足りない」という意見が多く見られた。今回は改善のために時間を長くするのではなく、聞ききれなかった発表をその後のフリーセッションで十分に行えるようにポスターに発表者の顔写真を掲載するようにした。アンケートの結果では半分以上の参加者が「満足」または「やや満足」という結果が得られたが、「時間が足りない」という意見は相変わらず多く見られ、顔写真の掲載に効果があったようには思えなかった。

＜反省点＞

今回も前回の合宿と同様に「時間が足りない」という意見が多く見られ、前回の問題点が改善できていないという結果だった。今回は時間をさらに長くするのではなく、それ以外のフリーセッションや休憩時間でのディスカッションの活性化し問題の改善を試みたが、あまり成果が出なかった。

＜改善点＞

時間不足を改善するには合宿の他のプログラムを削り、より多くの時間をポスターセッションに割くという方法が考えられる。それにも限度があるために、フリーセッションをより有効に利用できるように改善するべきである。今回は発表者とのコンタクトを取りやすくするような取り組みをしたが、実際にはそこでも十分なディスカッションは行えなかったと考えられる。フリーセッションやその他の時間でも十分な議論ができるような改善が必要である。

3. グループディスカッション

＜担当者＞

加賀　由章（仲野研 D2/D5：文責）
谷内　智行（河村研 D2/D5）
平山　育実（田中研 D3/D5）
長谷川　翔（小倉研 D2/D5）
吉田　真理（四方研 D2/D5）

＜背景・目的＞

本年度の合宿テーマである「若手 Evolution」をうけて、グループディスカッションでは『新しい研究室をつくろう』を目標に、グループごとに議論した。全日を通して議論を行い、最終日には議論の結果を全員で共有、確認するために発表および討論を行った。

＜方法・結果＞

合宿前に、参加者の情報をもとに研究分野、学年、英語力、興味のある研究室等を考慮しながら参加者全員を 6 人ずつのグループに分配しておいた。グループディスカッション初日は、メンバー同士で打ち解けることも目標に据えて各グループ内でポスターを利用して各々の研究を紹介し、メンバー間の理解を深めた。その後は全日を通して『新しい研究室をつくろう』を目標に、そのグループで研究室をつくつとすれば、何を目標に、どのような研究を行うのかについて、課題や克服法も含めて、各自の専門性や知識を活かして討論を行った。各グループは話し合った内容をスライドにまとめ最終日に発表をし、全体で質疑応答を行った。最後に、最もよい発表をしたグループを投票によって決定し表彰した。グループディスカッションには合宿期間中のうち 9 時間を割り当て、発表会には別途 4 時間を割り当てた。今回の合宿においてメインとなる企画であった。

＜考察＞

グループディスカッション中に参加者から「今、何をしたらいいのか分からない」といった指摘を受けた。これは委員の説明不足が原因と考えられ、反省すべき点だと感じた。また、海外からの参加者や阪大在籍の留学生も多く、言

葉の壁に当たる参加者も見られた。しかしながら、最終的に、アンケートの回答者のうち約6割は今回の企画に満足していることから、参加者にとって少なからず有意義なものになったのではないかと考察する。

4. 特別講演

＜担当者＞

谷内 智行（河村研 D2/D5：文責）
吉田 真理（四方研 M2/M2）
加賀 由章（仲野研 D2/D5）
長谷川 翔（小倉研 D2/D5）
平山 育実（田中研 D3/D5）

＜目的＞

本企画は特別講演①、②の二部構成で執り行われた。

特別講演①では、融合研究に携わる研究者を招聘し、研究者としての生き方や研究内容についてのお話を聞くことで、融合研究に対するモチベーションを高めることを目的とした。理論と実験を組み合わせた研究から、ロボットへの応用まで、幅広い領域で活躍される川人光男先生に講演を依頼した。

特別講演②では、参加者のプレゼンテーション能力の向上を目的とし、プレゼンテーションを行う際のテクニックに関する実践的な講演を、アルク教育社・Jeff Bates 先生に依頼した。今後、参加者がプレゼンテーションを行う機会は多く、効果的な発表手法を学ぶことは参加者にとって有用であると考えた。

＜実施内容＞

<u>特別講演①</u>

日時： ７月３１日（火） 13：00～14：30
講演者： 川人 光男
（株）国際電気通信基礎技術研究所 脳情報通信総合研究所 所長 / 脳情報研究所 所長 / ATR フェロー
演題： 「‘脳を創る事によって脳を知る’から操作脳科学を目指して」
（英題：From ‘Understanding the Brain by Creating the Brain’ towards manipulative neuroscience）
使用言語： 英語

<u>特別講演②</u>

日時： ８月１日（水） 17：00～18；30
講演者： Jeff Bates
ALC Education instructor

演題：　「『プレゼンテーションセミナー』～効果的な伝え方を学ぶ～」
(英題： Effective presentation)
使用言語： 英語

＜実施結果と反省点＞

特別講演①

特別講演①の様子

川人先生がこれまでに携わった研究内容を紹介していただいた。専門的な内容ではあったが、動画を交えたものであったため、専門外の学生でも楽しめる講演であった。

アンケートの「満足」「やや満足」を合わせた割合は約５９％と比較的高かったのだが、内容が専門的かつ英語を用いた講演であったためか、「難しかった」というコメントがいくつか挙げられていた。英語に不慣れな学生や専門外の学生でも楽しみやすいように、もう少し一般向けを意識した講演をお願いしておけば、より多くの参加者に満足してもらえたかもしれない。

特別講演②

特別講演②　実践パートの様子

講演の前半４５分をレクチャーパートとし、プレゼンテーションの基本フローやプレゼンテーションを効果的に行うためのノウハウを学んだ。後半４５分は実践パートとし、レクチャーパートで学んだことを活かしてプレゼンテーションの練習を簡単に行った。

反省点としては、会場のセッティングや参加者のグループ分けに少し手間取った点、参加者が実践パートの実施内容を完全には理解できていなかった点が挙げられる。これらの失敗は、委員と講演者との打ち合わせが不十分であったことに起因する。しかしながら、講演に支障が出るほどの問題ではなかった。

参加者アンケートの満足度は他の企画と比べて高く、「満足」「やや満足」を合わせた割合は全体の約７２％であった。アンケートには「ためになった」「面

白かった」というコメントが複数見受けられた。企画の目的が参加者のニーズに適合していたことや、講演の内容・構成が面白かったこと（話を聞くだけではなく実践も含まれた）により高評価へと繋がったのではないだろうか。

5. エクスカーション

＜担当者･文責＞

三須　晃裕（近藤滋研 D2/D5 ： 文責）
羽渕　真清（四方研 D2/D5）
岡本　優　（近藤寿人研 D2/D5）
北村　彩佳（名田研 D1/D5）

＜目的＞

研究討論から離れ、合宿の開催地である坂本の歴史的文化に触れることでリラクゼーションタイムを提供するとともに、若手研究者同士がお互いにより深く理解し合う場を設ける。

＜実施内容＞

エクスカーションは合宿二日目の昼食時から午後二時半の間に設けられた。目的地は下記の 2 ヶ所を用意し、参加希望者はどちらかを選ぶ選択制とした。

①三井寺コース
②西教寺コース

目的地にはホテル側のバスで移動し、約 1 時間半の園内散策を行った。各目的地にはそれぞれ 2 名の合宿委員が付き添い、寺院の歴史や建造物の説明などを交えながら英語による交流を行った。西教寺コースでは参加者の内、希望者は座禅体験が行えるコースも用意した。

散策の後、三井寺コースは地元の電車を使用し、坂本の街並みを散策しながらホテルへ戻った。西教寺コースはバスで直接ホテルへ戻った。

＜実施結果・反省点＞

どちらのコースともスケジュール通り進み、トラブルもなく終了した。参加者の感想では「あっという間だった」「座禅で心が洗われました」など良い気分転換となった意見がある中、「時間が短い」という意見もあり、スケジュールに慌ただしさがあったことがうかがえる。

本年度の合宿参加者は昨年度よりも少なかったため、昨年のようにバスの乗車人数の制限には苦労しなかった。エクスカーションの外国人参加者率は昨年より増加した。目的地の歴史や各寺院独特の特殊な日本語の説明を英語

で事前準備していたため、参加していただいた方々には日本の文化を知ってもらえる良い機会を提供できた。

6. 総括

今回の若手合宿は、参加者が将来的に異分野融合を促進していくにあたって、研究交流のためのよい機会となるだけでなく、その助けとなるような一歩踏み込んだ取り組みを通じて参加者が研究者として成長できる、そのような機会となることを目指した。

開催期間中は委員それぞれの働きや参加者の協力もあって大いに盛り上がり、アンケート結果でも全体を通じての満足度が高かったことからも、合宿全体として好評であったと言える。特にプレゼンのノウハウについての実践型講演の評価が高かった。また、前回に引き続き海外からの留学生と名古屋大学の大学院生にも参加していただき、研究分野と文化の面で幅広い交流を行うことができたので、非常に有意義であった。今後もこの若手合宿を継続して開催していくことは、将来的に融合研究に携わる若手研究者の育成に大きく貢献できるはずである。

一方、例年と同様、D3 以上の参加が積極的ではなかった。これは、学年が上がるほどどうしても自身の研究の都合を優先する傾向が強くなってしまうことが一因かもしれない。また特に今回はポスドクの方々の参加がゼロであったことからも、昨年度で GCOE が終了したことも影響しているのかもしれない。本合宿が異分野の研究者が交流し自らの研究にフィードバックできる格好の機会となりうることがより広く認知される必要がある。そのためにも運営側としては、合宿の内容やあり方について、D3 以上にとってもより魅力的で参加しやすいものを模索しつつ、それをより効果的に発信していく必要があると思われる。

また、D1、D2 の低学年層の参加者が多かったこともあり、原則英語による発表やプログラム進行をハードに感じる参加者も多かったようである。これは裏を返せば、本合宿が、研究交流における英語でのコミュニケーションの重要性を参加者に自覚してもらえるよい契機となりうるということである。その意味でも、低学年層からの英語教育の一層の充実を進めつつ本合宿を継続していくことは、非常に有意義であると思われる。

（文責: 川上 拓宏　D3/D5　小倉研）

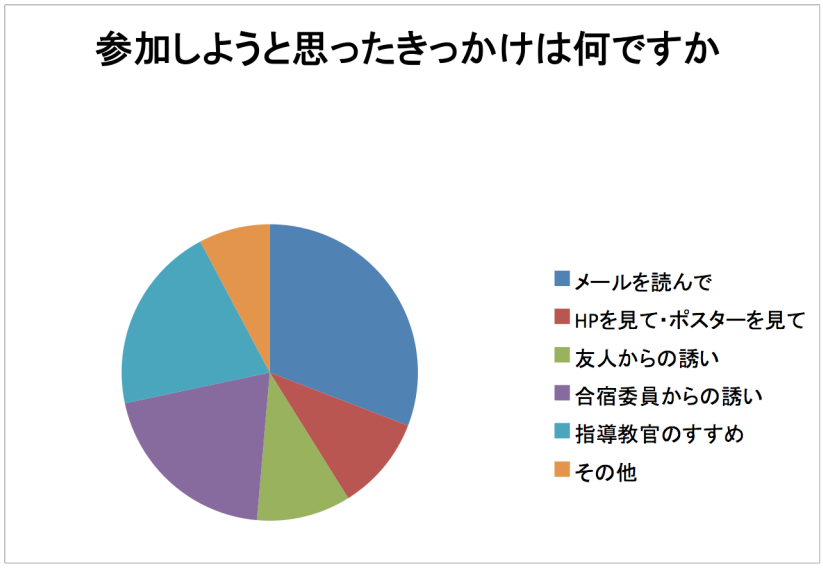
＜第六回学生主催若手合宿研究交流会　実行委員紹介＞

名前	学年	研究室
加藤　大典	D2/D5	視覚神経科学研究室（大澤研）
松原　健一	D4/D5	発生遺伝学研究室（濱田研）
Percival P.Sangel	D4/D5	細胞内分子移動学研究室（米田研）
川上　拓宏	D3/D5	神経可塑性生理学研究室（小倉研）
井之上　幸範	D3/D5	心生物学研究室（八木研）
木本　千裕	D3/D5	細胞内分子移動学研究室（米田研）
平山　育実	D3/D5	細胞機能学研究室（田中研）
加賀　由章	D2/D5	病因解析学研究室（仲野研）
谷内　智行	D2/D5	細胞内情報伝達研究室（河村研）
吉田　真理	M2	共生ネットワークデザイン学講座（四方研）
長谷川　翔	D2/D5	神経可塑性生理学研究室（小倉研）
三須　晃裕	D2/D5	パターン形成研究室（近藤（滋）研）
岡本　優	M2	形態形成研究室（近藤（寿）研）
羽渕　真清	D2/D5	共生ネットワークデザイン学講座（四方研）
橋本　勇人	D2/D5	脳システム構築学研究室（村上研）
植村　有里	D2/D5	生体分子機能学研究室（倉光研）
吉田　宗生	D2/D5	生命動態イメージングセンター（柳田研）
北村　彩佳	D1/D5	発癌制御研究室（岡田研）
青木　康一	D1/D5	ナノ･バイオフォトニクス研究室（井上研）

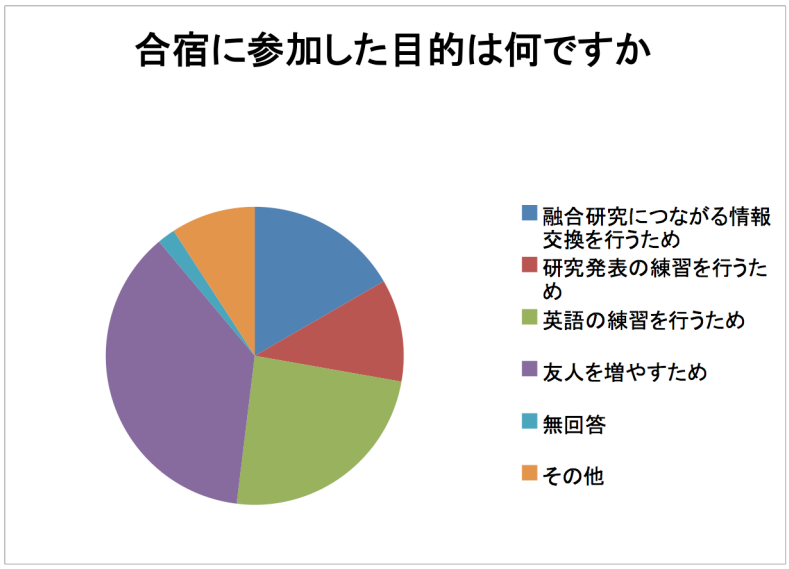
＜謝辞＞

本合宿は、大阪大学大学院生命機能研究科グローバル COE プログラムが終了した今年度は、研究科の支援のもと開催されました。このような機会を与えて下さった難波先生、柳田先生、研究科長の濱田先生、また海外研究者の招聘に協力してくださった先生方、絶妙の加減とタイミングで助言とサポートをして下さった中島さんを始め企画室の方々、そして、合宿の開催に尽力してくれた実行委員の皆や合宿に参加して下さった皆様に、深く感謝致します。

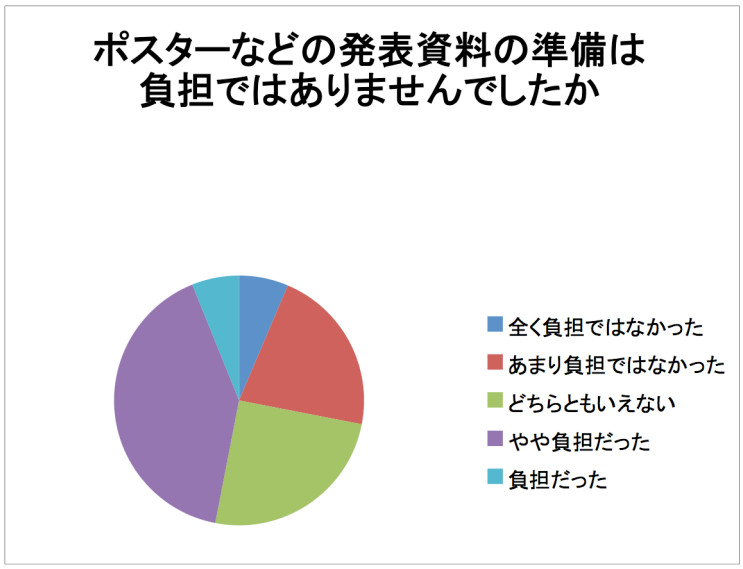
7. アンケート集計結果

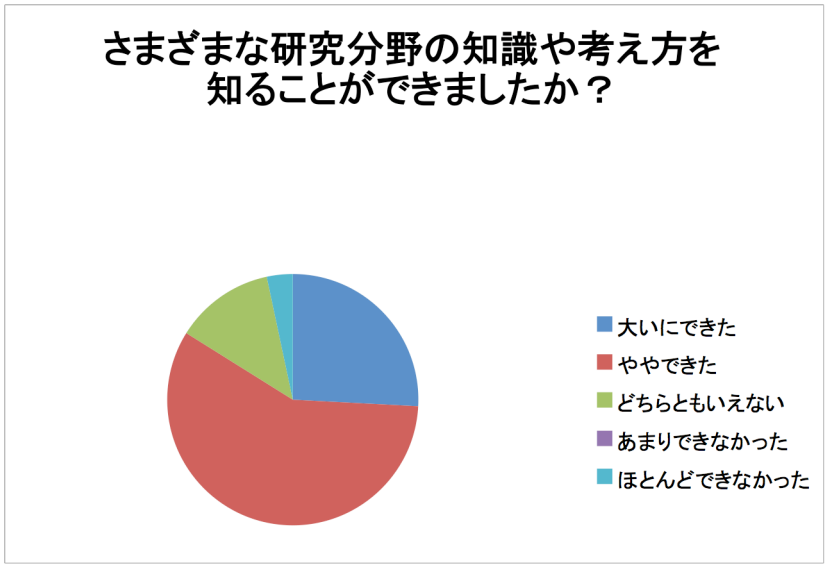


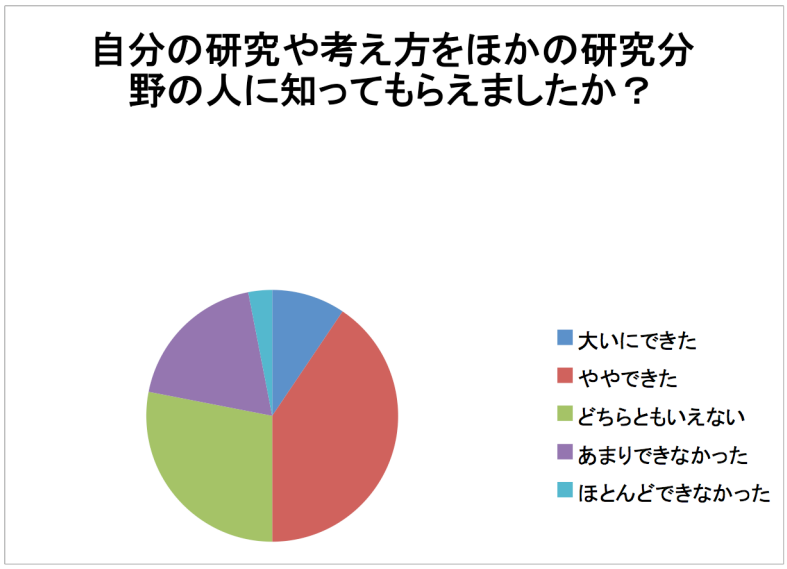
<その他>
合宿委員だから/研究室が強制的だったから

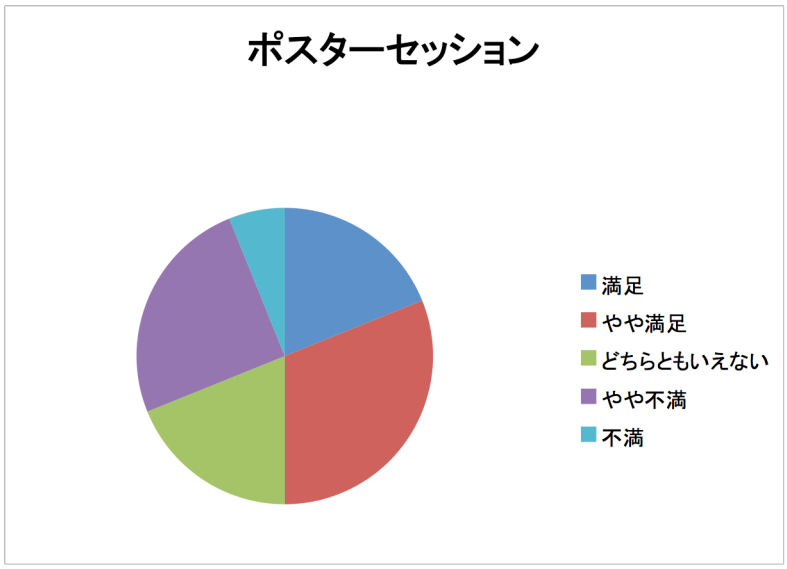


＜その他＞
興味/どのように研究を行っているのか知りたかった/sightseeing/楽しそうだったから

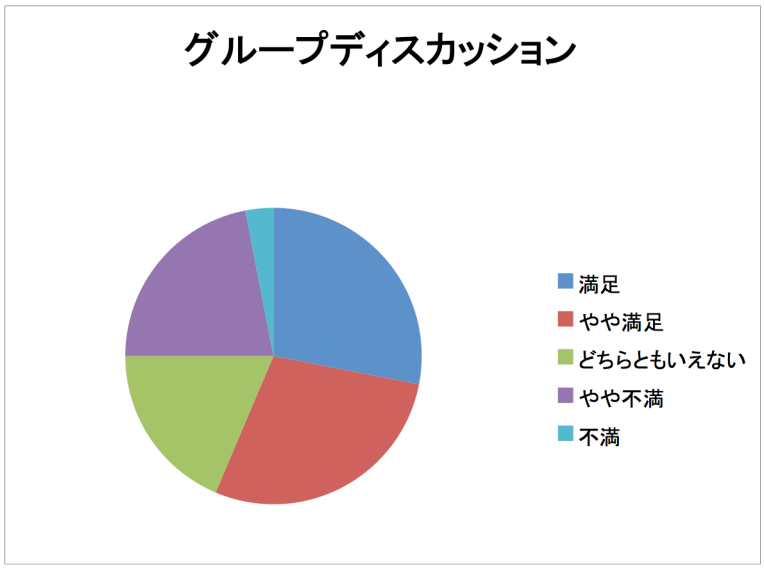

ポスターなどの発表資料の準備は
負担ではありませんでしたか
全く負担ではなかった
あまり負担ではなかった
どちらともいえない
やや負担だった
負担だった


さまざまな研究分野の知識や考え方を
知ることができましたか？
大いにできた
ややできた
どちらともいえない
あまりできなかった
ほとんどできなかった

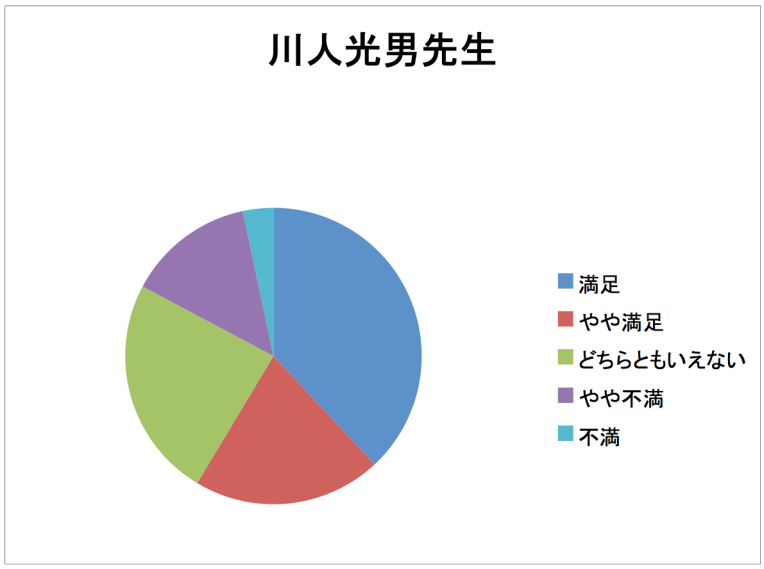




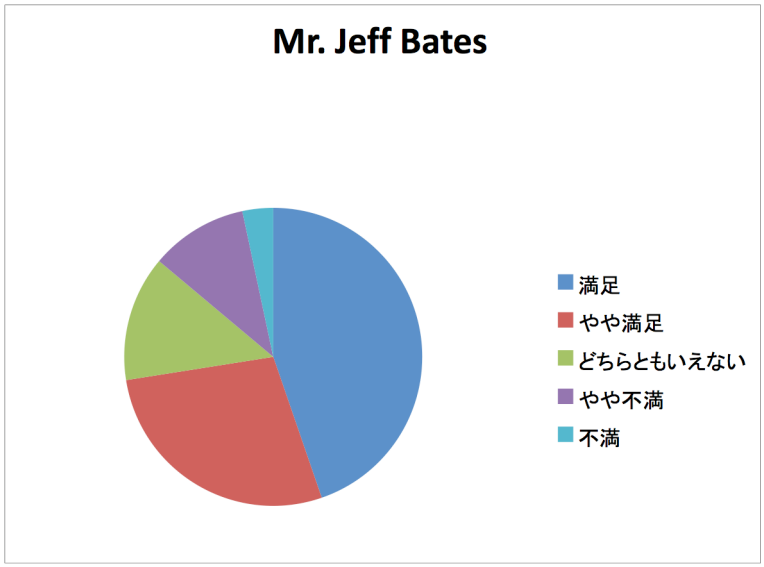
＜具体的な意見＞
時間が短かった。飲みながらもしたかった/時間配分もよかったと思う。表紙の顔写真は良いと思った/投票はその場ですぐできるようにしておくべきかなと思った/どのように研究を行っているのか知りたかった/短い/生命機能研究科のほかの研究室の内容を詳しく知ることができた/交代の時間が分からなかった/回りきるのに時間が足りなかった/ほぼフリーセッションだった/聞きたい人が聞ききれなかった



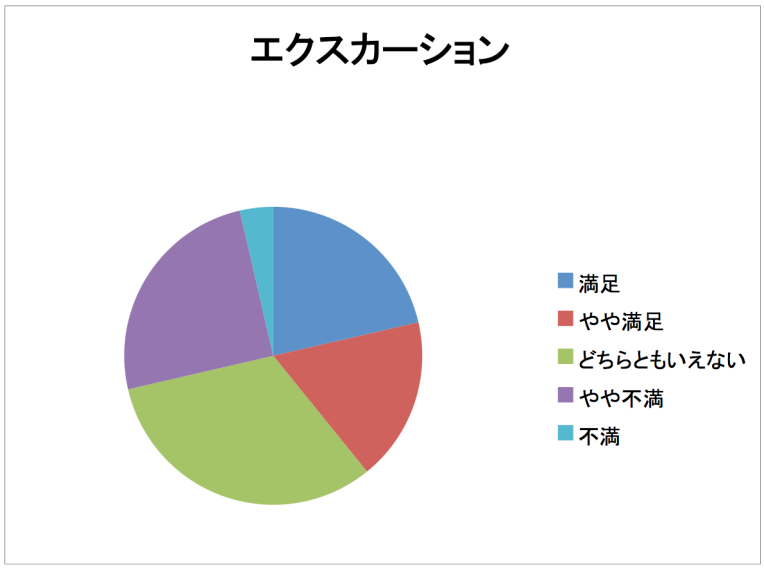
＜具体的な意見＞
委員がきちんと何するか把握してほしかった/少し時間が足りなかった/けっこう負担だったが十分に話し合えたと思う/スライドまで作ると時間足りなかった/too much/Passion で片づけるのは面白くはあるが、議論の放棄であると思う/懇親会ではないので最低限のメリハリはつけてほしい/班員と仲良くなれた/長い/問題を自分とは別の視点から解決できる人と交流できた/様々なバックグランドの人と一つテーマを決めて、自分に何ができるか考える機会はなかなかないので勉強になったし、楽しかったです/グループ割が分野がかぶり気味だと思う/時間なさすぎた/ちょうど良い気もするけど、少し短い気もした/企画に無理がある気が…/外国の方といろいろ話し合うのが面白かった/active discussion



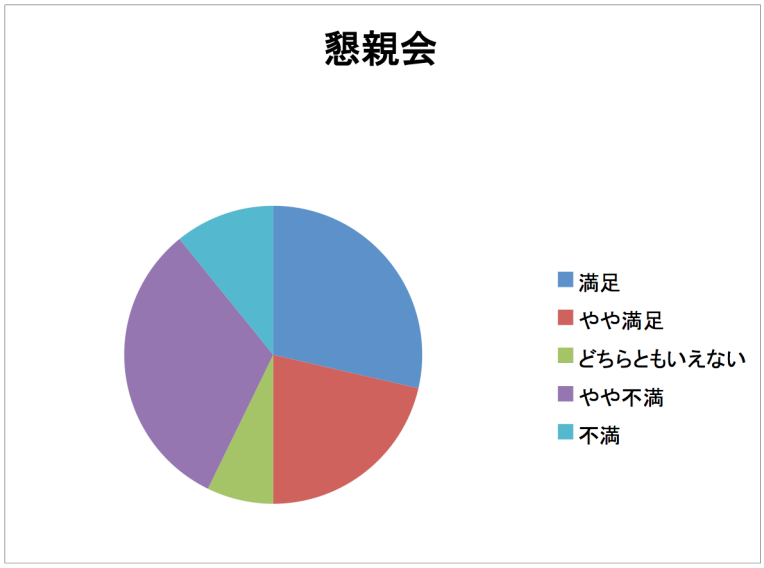
＜具体的な意見＞
すごく良かった/難しすぎてよくわからなかった/話が難しかった/日本語で聞きたかった/内容は面白かったがちと長かった/もう少し話題を絞ったほうがいいと思う/内容が充実していた/脳の仕組みに興味があるから（満足）/融合研究につながりそうな話で良かった/impressed by his research,wow！



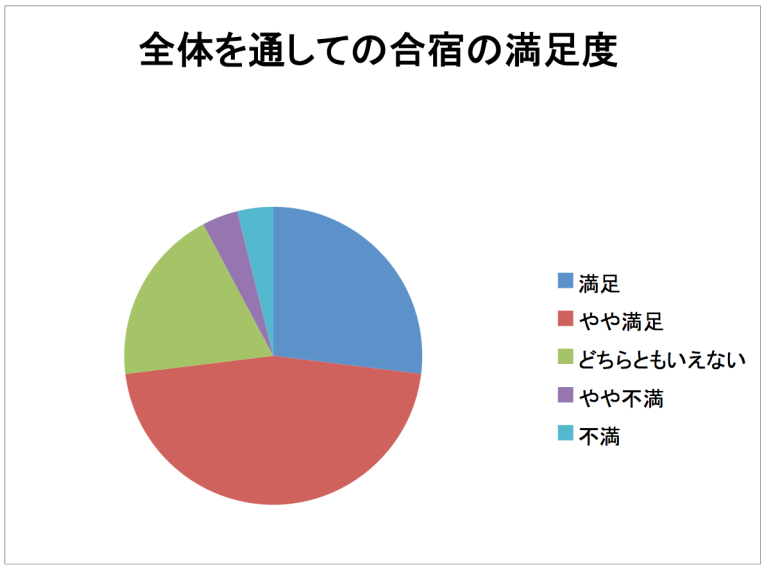
＜具体的な意見＞
いろいろと勉強になった/とてもわかりやすい/非常に参考になった/以前の ALC とほぼ同内容だった/とても良かった/内容が充実していた/おもろい/人を引き付ける話し方のコツを知ることができた/効果的なプレゼンテーションの方法がきけてこれから大いに生かせそうです/とてもためになった



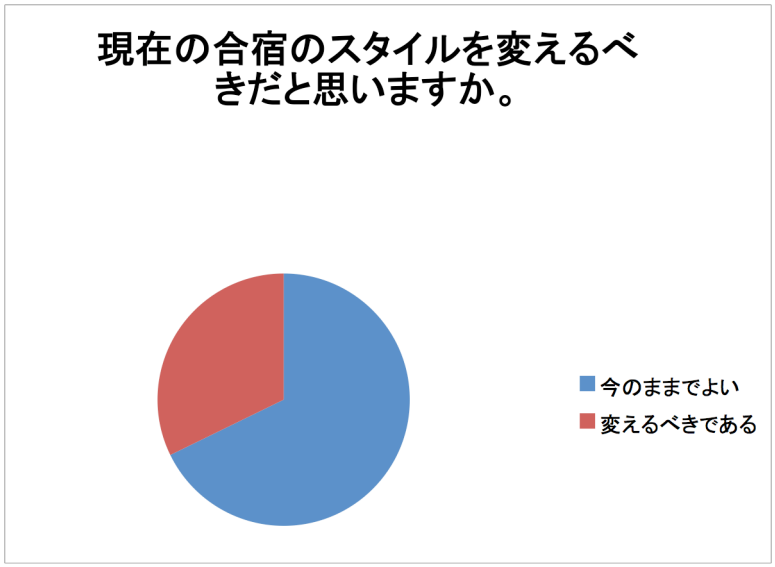
＜具体的な意見＞
あっという間だった/ちょっと時間が少なかった/琵琶湖遊覧等が希望/あまり自由に見学できなかった/短すぎる/西教寺はあまり自由に見て回る時間を確保できなかった/座禅で心が洗われました/禅でほとんど時間をとられた



＜具体的な意見＞
飲み部屋がほしい/つまみ的なものがなかった(お菓子はあるけど)/酒類の不足/遅くなっても使える懇親会会場がほしい/他の班との交わりがしずらかった/楽しかった/グループディスカッションから移りにくい/もっと自由に行いたかった/お酒飲めたらもう少し楽しかった/おもろい/お酒がたりない/部屋がしまる時間が早い。ホテルが閉まるのも/人それぞれ



＜具体的な意見＞
合宿委員に負担がかかりすぎだったのでは/一般客の少ない貸し切れる施設でやってほしい。青年自然の家など/講義を短くして自由時間をもっとほしい/それぞれの企画の目的をハッキリさせたほうが良い/ポスターをもう少し聞きたい/「新しい研究室を作る」という企画に無理があるように思う。ポスターをメインにした内容にした方がディスカッションが展開できるのではないか/初日の食事の際にお酒が欲しかった/Instead of party or excursion, it will be interesting to have game activity (indoor/outdoor) to promote friendship between participants./泳ぎたい



＜具体的な意見＞
委員さんお疲れ様！/タイムテーブルがあるので最初に諸注意を伝えておけば基本放置で

いいのではと思いました/ベストプレゼンターには研究費(10～20 万/人)などの賞がほしい。そのほうがモチベーションが上がる/最後のプレゼンの合間に休憩がほしかった/エクスカーションの時間少し増えてほしいです/とてもすばらしい環境で有意義な時間が過ごせてよかったです。ありがとうございました/Thanks for the hospitality of all committee members. I've got lots of help.